

3 肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚

清野 謙次

第1章 曾畑貝塚研究記録の考古学上に特に重要な理由

ソバタ貝塚は曾畑田と書くのが正しいらしいが、諸報告には曾畑と書いてある。曾畑でソバタと発音出来るから私も曾畑と書くこととした。

曾畑貝塚は石器時代土器研究者によつて細形刻紋または細直線紋と呼ばれる特色ある紋様の土器を出すので九州に於ける有名な貝塚である。殊にこの紋様が朝鮮の石器時代土器の或る種類と至大な関係があるし、また琉球の石器時代土器と関係が深いので、考古学者によつて大いに注意せられた。

ところがこの貝塚は今日全滅に近い姿となつてしまつた。後述の如く、私はまさに開墾せられようとする直前にこの貝塚を発掘して数100片の土器片を採集し得た。そしてまだ残地があるので貝塚はこの残地にも残存すると思つて居つた。後年、九州の石器時代土器研究家小林久雄氏に面談した所が、貝塚の残地は殆んどなく、土器の小片を少数採集し得たのみであつて、私の採集し得たる如き大破片はもはや見当たらないと聞いてびつくりした次第であつた。

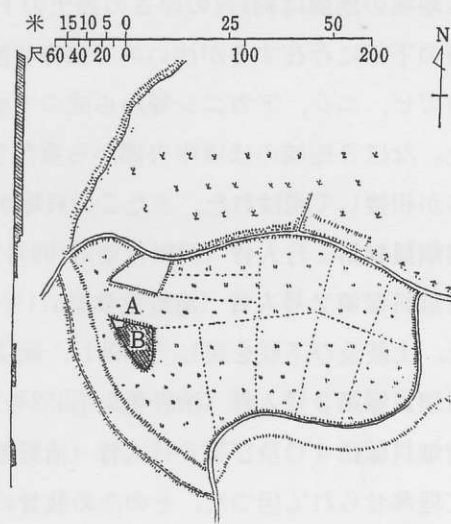
それだから私の蒐集が曾畑貝塚最大の遺品であつて、この蒐集に基づける記載が曾畑貝塚発掘の最も精細なものだといへる。それで以下の記載は簡単ではあるが、考古学の資料として重要である。

第2章 発掘の概要と人骨の出土状態

大正11年3月に、私は別記の如く（第1部第4篇）肥後国当尾村大野貝塚を発掘した後に、その発掘品を荷造した。それが了つてから熊本県史蹟調査委員であつた所の古賀精義氏に案内せられて、麗らかな春光を満身に浴びつつ人力車上にゆられながら北方里余を隔つる曾畑貝塚に着いた。

曾畑貝塚は轟貝塚（第1部第2篇）と阿高貝塚との中間部に位置する。貝塚から南方には山をめぐらし、西から北にかけては遠く肥後の水田平野がひらけて居る。この貝塚は僅かに高まつた丘の上に在つて、その大部分は桑畑になつて居る。ただ貝塚西南端の一番低い所は、私の訪れた当時には土採りの作業中であつたから、荒らされて居つた。

貝塚のこの部分の地主は曾畑の人で木村定次郎氏といつた。私等は同氏を訪うて来意を告げ、再び貝塚へ行つた。木村氏の話では自分の所有地の一部に貝塚があつて、地味が悪いから貝殻と土壌とを運び去つて低い水田にする筈で、目下土工に着手中だといふ。目下残つて居る所は水田上約3尺高い畑地（第1図のB）30坪ばかりの所であつた。この部の断層を検査すると2尺内外の厚さの貝層が見える。地つづきの既に土取りしたAの部分から人骨が出たといふ。人骨の1片を棄てたといふ場所を捜した所が人骨片が出た。それはまぎれもない石器時代人大腿骨の特長を具へて居たから、私はこの残部すなはち図のB部位を発掘すべく決心した。しかるに遺憾ながらこれは当時突然に出遭した事件であつて、さらに引続い



第1図 曾畑貝塚付近地形図

てこの地に滞在する余日がなかつたので、他日再び発掘の目的で来訪することとして、その時までには残部に手を附けないこととし、従つてまた水田を作れない間の損害は私が負担する約束が成立して、一まづ私は京都へ引き上げることとした。

木村氏と話して居る内に、私はこの人と若干の因縁に結ばれて居る間柄であるのを知つた。私が大正9年に轟貝塚と阿高貝塚とを発掘した時に、同地方の住民から明治初年にこの両貝塚の貝殻を採って石灰に焼いた人があつたと聞いた。そして轟貝塚の人骨の多く出る部分はこの時に失はれたといふ話であつた。ところがこの木村氏がこの貝殻焼きの当人であるのを知つてびっくりした。すなはち木村氏は当初この曾畑貝塚の貝殻を焼いて居たのであつたが、貝殻の分量が減少して来たので轟貝塚と阿高貝塚とへ出掛けたのだといふ。惜しむらくはかくの如くにして、この3大貝塚の貝殻の厚い部分は研究せらるることなく失はれて、貝層の薄い土まじりの部分だけが残つたのであつた。しかしその後には貝殻を焼いて石灰を採るのは採算上、引合はなくなつたのでこれを止めたといふ。

かくして私は曾畑貝塚から京都へ帰り、満1年後の大正12年3月2日から宮本博人君と共に曾畑貝塚の発掘に取り掛かつた。前述の如くA地点は前年発掘せられて既に水田と化して居つたがB地点は発掘の約束で残されて居た。木村氏との話では古くはA、B周囲の水田一面にも貝殻が在つたのだが上記の如く明治年間に掘下げて水田とせられたのであつた。そしてB部が大貝塚の最後の残存部であつたのを後に知つたが、発掘時には北方桑畑にも貝層が延長して居ることと思つて居た。

宮本君と私とはB地点の東北端から人夫を傭つて発掘を始めた。熊本からは古賀文学士等も来り授けられた。

3月2日は天気がよくて南地の空は暖かつた。午前中に私は宮本君と現場に居つたが、午後には現場を宮本君に托して、古賀氏と共に下益城郡六嘉（ろつか）村貝塚を訪うた。それは拙著『日本人の研究』（大14）第73頁に示した如くこの貝塚からも人骨を獲たのであつた。

自動車を飛ばして3里離れた六嘉村を訪うて再び自動車で帰つて来ると、私の不在の間に宮本君は、やや完全な人骨と不完全人骨との2体（曾畑第2号及び第3号人骨）を掘出して居つた。発掘は3月3日と4日との合計3日間継続してB地域の全部を発掘し了つたが、不完全人骨をさらに3例加へ得たのに過ぎなかつた。

B地域の地層は約1尺の厚さの表土の下に厚さ1尺から2尺5寸の黒土まじりの貝層がある。人骨は貝層の下部に存在するが浅いので保存状態は不良であつた。貝殻は海産でカキ、ハマグリ、サルボウ、アカガヒ、ニシ、アカニシ等から成つて居た。石器若干のほか、後述の如く、特色ある土器片が多かつた。なほB地域のほぼ中央部から重なり合つて、後掲の如く、40個近くのハマグリの殻に穴をあけたものが相接して現はれた。またこの貝塚から出土した6例の人骨に就て記載すると次の如くである。

曾畑貝塚第1号人骨（清野蒐集第199号） 第1回探訪時にA地点から偶然出土して居た人骨破片。

曾畑貝塚第2号人骨（清野蒐集第571号） かなり完全な人骨で地下2尺5寸、貝層下部から発見せられた。上肢及び下肢を屈して仰臥し、頭位は東北にあり。

曾畑貝塚第3号人骨（清野蒐集第552号） 保存状態極めて不良なる人骨片。

曾畑貝塚第4号及び第5号人骨（清野蒐集第553号及び第554号） 保存状態不良。兩人骨は極めて近接して埋葬せられて居つた。そのため肢骨の一部分は相混じた。兩人骨共に仰臥屈葬、頭は東北にあつた。

曾畑貝塚第6号人骨（清野蒐集第579号） 保存不良。仰臥屈葬。頭は北にあり。

第3章 文献的記載

曾畑貝塚を学界に初めて紹介した人は若林勝邦氏であつて『東京人類学会雑誌』第5巻第49号（明23）にこれを記載した。同氏は曾畑貝塚から石斧のほかには土器片を採集し、その土器紋様として「刻み目の並行あり、斜線の交叉あり、表裏に画ける斜線あり、縄文を印せるあり」と記してある。これで見ても明らかな通り、若林氏はこの貝塚から数多く発見される代表的紋様たる細形刻紋に着目したと同時に、縄紋ある土器片も交つて居ることを記して居るのだ。

その後に寺石正路氏は『東京人類学会雑誌』第5巻第53号（明23）に曾畑貝塚に就て簡単に、この貝塚から半磨製石斧と縄紋土器片を出す由を記して居る。

大正7年に至つて中山平次郎氏は『考古学雑誌』第8巻第5号に「肥後国宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器」といふ一文を掲げた。これは中山氏がこの貝塚の表面採集によつて獲られた土器片を基礎として、この貝塚の土器紋様を論じたものである。土器の大部分は後年の細形刻紋土器と呼ばれるものであつたが、少数の異なつた紋様ある土器片を出す由を述べて拓本を図示してある。それは阿高貝塚に多く見る所の太い凹線を使用しての曲線紋土器片（太形凹紋といはれるもの）、磨消縄紋、隆線で画いた直線及び曲線紋様である。

以上の3報告が私の曾畑発掘以前に現はれたものであつた。その後、昭和14年8月に至つて『人類学先史学講座』第11巻に小林久雄氏の「九州の縄文土器」がある。これは曾畑貝塚の発掘報告ではない。九州の先史時代土器論の一部分として曾畑貝塚に多い細形刻紋土器に就て論じてある。

こんな次第だから曾畑貝塚で初めから問題になつて居るのは特色ある細形刻紋土器であつて、石器は一向問題にならない。それは石器が1個2個の少数しか出なかつたからである。ところが後年土器の破片は多数発見せられたのみならず、細形刻紋の類例が朝鮮から発見せられたのみならず、琉球の先史時代土器にも類例があるのでこの貝塚土器は考古学者の特に注意する所となつた。

こんな次第なので南鮮から北鮮に亘つて出土する所の細形刻紋の類品に就て手近にある文献から記述する。

昭和10年に齊藤忠氏が『考古学雑誌』第25巻第6号（昭10）に「慶尚南道蔚山郡西生面出土の櫛目文土片」として図示して居るし、山本博氏は「西日本の弥生式問題」（『考古学雑誌』第25巻第12号，昭和10）中に、慶尚南道牧之島，平安南道竜岡郡海雲面，咸鏡北道城津郡津面，同慶興郡雄基面，京畿道慶州郡九川面，同江華郡下道面から発掘せられた同種土器を図示して居る。後藤守一氏も、『東洋考古学』

（昭9）の中の「日本考古学」部第483頁以下に櫛目紋土器の総合的記述を行つて居るし、藤田亮策氏にもこの種朝鮮発見類似土器に就ての記述がある。

第4章 発掘遺物

1 馬歯

自然遺物中で特に記して置かねばならないのは、曾畑貝塚から1個の馬白歯（長1寸9分）を発掘したことであつて、馬がこの時代に既に飼養せられて居たのが分る。

2 貝輪

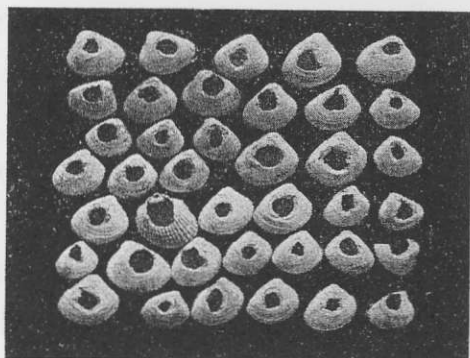
発掘の概要で記述した如く、B地域の中央部に近い小区域に図に示せる如く多数の貝輪が発見せられたが、その中の約3分の2，39個の貝輪を図に示した。その中のただ1個だけが図に示す如くアカガヒ製の貝輪で、その他はハマグリの大形のものである。このアカガヒ貝輪の大きさは3.2×1.8寸で、孔は

2.0×0.8寸の大きさに穿たれて居る。ハマグリ穴もアカガヒの穴も極めて粗末に穿たれて居つて、穴の周囲は単に打ち欠いただけで毫もすり込んでいない。また貝殻の表裏共に研いだ跡がない。

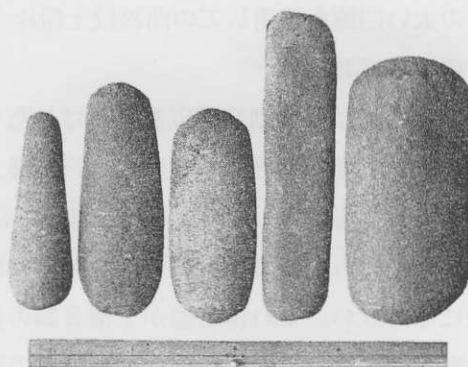
この多数の貝輪の出た辺には貝塚の貝層は切れて居つた。そしてこの貝輪群の穴の中へ1本の紐が通してあつて、古くこれを連ねて居たが、紐は腐つて消失したと思つても差支へない位置で発見せられた。

アカガヒ製の腕輪は石器時代人骨の前膊部にはめ込まれたまま発見せられたが、それは通常精巧な貝輪であつた。穴の縁部もすり磨かれて居つたし、貝殻の表裏面も平滑に研磨されて居つた。ただしここに見る程度に近いアカガヒ製貝輪であつても、腕輪たり得るのであつて、曾畑貝塚に近い轟貝塚の人骨はこの程度に近い粗製貝輪を佩用して居つた。それは京大考古学教室から報告した私の「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」(『京大考古学研究報告』第5冊、大9)に記しておいた。

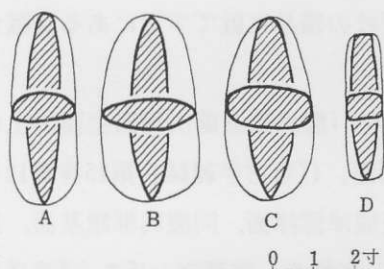
しかしこの場合にはアカガヒ製貝輪はハマグリ製貝輪と一所になつて居る。ハマグリ製貝輪が腕輪に使用せられた例はまだないし、またこの39個の貝輪の穴には腕輪に使用し得ない程小形の穴もある。そ



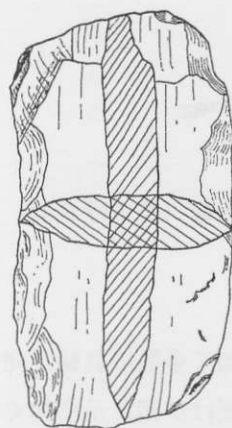
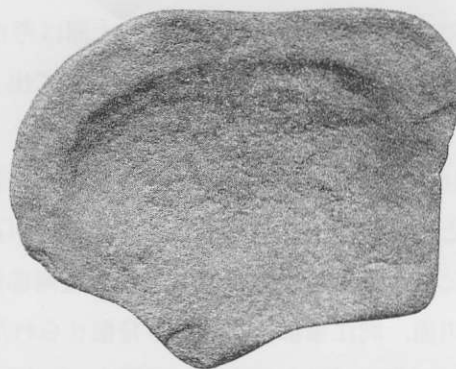
第2図 曾畑貝塚の一区より発掘の粗製貝輪写真



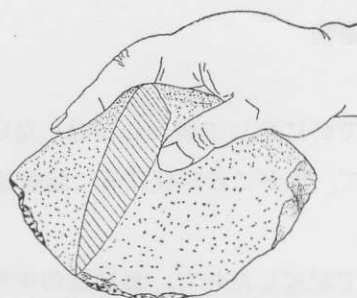
第3図 曾畑貝塚出土の石杵、石皿写真



第4図 曾畑貝塚出土の磨製石斧の型式模式図



第5図 曾畑貝塚出土の打製石斧実測図



第6図 曾畑貝塚出土石庖丁使用法想定図

れでこの貝輪は多分腕輪用のものでない。従つてこの貝輪群は腕輪たる目的で作られたものでない。他の目的の用品であるが穴に紐を通じて装飾用に使つたものやら、或いは他日夫々必要な目的に使用するために紐を通じて保存したものやら分らない。しかし珍しい所見として注意すべきである。

かつて大野雲外氏は三河貝塚から出土した多数の貝輪に種々の大きさの穴を穿つたものを並べ写したことがあつた。それはここに写したものとは異なつて一小局所から発見せられたものではなく、貝塚の各所から発見せられたものであつたが、これを穴の大きさに順じて並べて、まづ小さな穴を穿つて後に次第にこの穴を拡大して貝製腕輪に見る如き大穴ある貝輪にしたものだと解釈した。これに対して江見水蔭氏は、穴の小さい貝輪は貝輪の未製品のみだと考えるのは宜しくない。或る程未製品もあるだらうが、小穴を穿つたままで別の用途に使用せられた場合もあるに相違ないと考へた。水蔭氏の批難の方が尤もである。

また私達はこの貝塚をかなり広く発掘して石器は相当数出したのに拘らず、骨器角器の類を全然採集し得なかつたのは注意を要する。

3 石杵

曾畑貝塚から割合に多数の石杵を発掘したのはこの時代に既に原始農耕によつた収穫で一定度の穀食が行はれたのを示すものではあるまいか。私達は下の写真に示す合計5個の石杵を得た。その横断面は円形ないし楕円形の長形である。自然に長味を帯びた河原石を採り来つて多少の加工——側面研磨を加へて規則正しい形にした。そしてその上下端にはすり跡或は叩き跡が附いて居る。

第3図の右端の品から左端の品へと計測して見ると表の如くである。ただし重量は秤の都合上、gで示した。

番号	長さ	中央部直径	重さ
1	4.2寸	1.8×1.7寸	700 g
2	4.9	1.0×0.9	290
3	3.4	1.4×0.7	240
4	3.8	1.3×0.7	190
5	3.2	0.9×0.6	100

4 石皿

小形の品がただ1個出た。それは第3図下に示した品で関東発見石皿とは少々形式が異なつて居る。大きさは5.5×4.3寸で厚さ0.5寸、重さ610gである。裏の凸面は美しく磨かれて居り、表の凹面には多数の小さい叩き跡を留めて居る。

5 磨製石斧

磨製石斧は11個出土したから、曾畑貝塚で多く発見出来るものだといへる。すべて両刃の石斧で多くは短冊形だから柄の部分も刃の部分もその幅が大して差がない(11個中の10個まではそれである)。ただ1個のみが柄部がやや著しく狭くなつて居る。製作法としては石斧の形状に近い自然石を採り来つてこれに多少の加工を施して石斧の形状にすり上げたものが多い。加工法の一部として自然石面に多少打撃を加へて形を整へたものもあるので、胴の一部分に打製の跡を留めて半磨製石斧といふべき形のものもある。

中央部の横断面からいふと、大体に於て4型式がある。その中のA型はただ1個であるが横断面半月形であつて石斧の一面は平たい。これは片刃の傾向が著るしいが、実際の片刃石斧は遂に見られない。

B型は曾畑貝塚に多い。11個中の4個がこれである。この型式は横断面レンズ型を呈するが分厚いものと薄いものとある。C型も曾畑貝塚に多く11個中の4個である。D型はC型の一部と考へてよいものだが、石斧は分厚くて細長い。のみといはるる種類であるが、朝鮮に少なくない。C型の横断面は楕円形ないし丸味のある四辺形ともいふべきものである。11個の石斧の大きさと形状とは次の如し。

番号	長さ	幅	厚さ	型式	破損の有無	重量
1	4.6寸	1.5寸	0.8寸	A	完全	235 g
2	4.5	2.0	0.7	B	完全	250
3	4.0	1.5	0.5	C	完全	125
4	4.3	2.2	0.8	C	完全	420
5	4.0	1.3	1.0	C	完全	230
6	5.1（以上）	1.9	1.4	D	刃部欠	640
7	3.5（以上）	0.8	0.6	D	柄部欠	100
8	2.7（以上）	2.0	0.3	B	柄部欠	130
9	3.5	1.6	0.4	B	完全	100
10	3.6	1.8	0.5	B	完全	170
11	3.7（以上）	1.7	0.6	C	刃部欠	320

6 打製石斧

打製石斧は4個出た。その1個をここに図示するが、いずれもこれに似た長方形である。用石は雲母片岩、硬砂岩のほかには黒青白色の紋をまじふる美しい蛇紋岩製のものが1個あつた。大きさは下に記す通り。

番号	長さ	幅	厚さ	重さ
1	5.1寸	2.3寸	0.6寸	340 g
2	4.0	2.0	0.3	150
3	3.0	1.7	0.3	110
4	4.5	2.3	0.6	410

7 石庖丁

石庖丁といへば満鮮の石器時代遺跡から出土するスレート製磨製石庖丁を想起せしめるが、曾畑貝塚からその形式のものは発見せられなかつた。以下述べんとする3品はその用途からいつて石製庖丁といふべき品であるが類品を余り見ないものである。

第1種は使用法を想像して図示した品で淡褐灰色の硬砂岩製の磨製品である。長さ5.3寸、幅3.8寸、厚さ0.8寸の大形分厚の品で、どうもスレート製石庖丁とは余り似て居らない。どこまで関係があるかは後来の研究を要するが、大野延太郎氏「石鋸に就て」（『人類学雑誌』14-161, 明32）の中にいく分これと似た品が3個ある。ただし大野氏の品は破損品ばかりであるからよく分からない。出所として大野氏の3と4は、北海道室蘭、5は武蔵国西ヶ原だといふ。

第2の石庖丁は第1の品と大分異なつた形で半磨製石斧の一種と解してよいかも知れない。淡黒色片岩製で鋭い刃が附いて居る。石斧にしては側面にも刃が附いて居つて異形だ。長7.0寸、幅2.3寸、厚さ0.6寸の大形品である。

8 土製紡錘車

黒褐色の土製品である。直径2.1寸、厚0.6寸。大形で中央部に穴がある。表面はへらでなでて平らにされて平滑だが、少し角張った所が残つて居る。南鮮の石器時代から土製紡錘車の発見が稀でないが、曾畑貝塚からこの品を発見したことは曾畑文化と朝鮮石器時代文化とをさらに一步近寄せたこととなる。そして曾畑住民は既述の如く原始農業を営んで居たと共に大陸式紡織を行つて居たと思ふべきである。

9 土器

土器の特色は褐色のものが多く、時として黒色のものもある。厚さは概して薄手（2-3分）のものが多いが時として3-4分の中厚手のものもある。土質は砂を含むこと少なくして比較的堅硬、時として雲母の混入の著明なものがある。森本六爾氏はこれを滑石末の混入と解して関東の繊維土器にこれを比して居る（「滑石混入の縄紋土器」『考古学』第5巻第10号、昭9）。土器の表面は研磨せられて居るが充分でない。器物の形状は深い鉢形或は浅い鉢形に限られて居る様だ。殊に前者が多い。口径は4-7寸のもの、つまり中形土器が多い。大形破片を測つた所が、直径4寸のもの2個、5寸のもの6個、6寸のもの5個、7寸のもの7個、8寸のもの1個、9寸のもの1個あつた。

土器片には紋様のあるものが多い。そして紋様の8-9割は細形刻紋だ。縁は平縁であるが、口唇部に連続切り目を附して、きざみ縁としたものが少なくない。細形刻紋の印せられた土器は悉く平縁で波縁はなくまた把手もない。それは土器の形態図に示せる如くである。ところが、5阿高式紋様のある土器、8曲線縄紋のある（鐘ヶ崎）土器には縁瘤が造られたものもある。また、4みみず膨れ線で紋様を附せられた品の中には小把手ともいひ得べき突起が縁に附されたこともある。

紋様は土器の表面に附してある。縁に沿つて紋様帯となつて居るだけの場合もあるが、しばしば縁を越えて胴腹部にまで及んで居る。しかし底に近い所は紋様がない。

割合に多数の場合（約2-3割位）縁の内側に沿つて内紋様が附されて居る。これは当然外開き土器に多いが、直壁の口の開きの少ない土器にもこれを見ることがある（他の貝塚では内紋様は平たい皿以外には余り見ないものである）。この内紋様は列点紋、列線紋、或は両者混用の簡単なもので縁に沿つて帯状に画かれて居る。

土器の内面と外面との中間部、すなはち口唇部には、往々きざみがある。ただしきざみの幅の広さは種々である。そしてまた、ここには貝殻の圧痕紋が印せられて居ることもある。

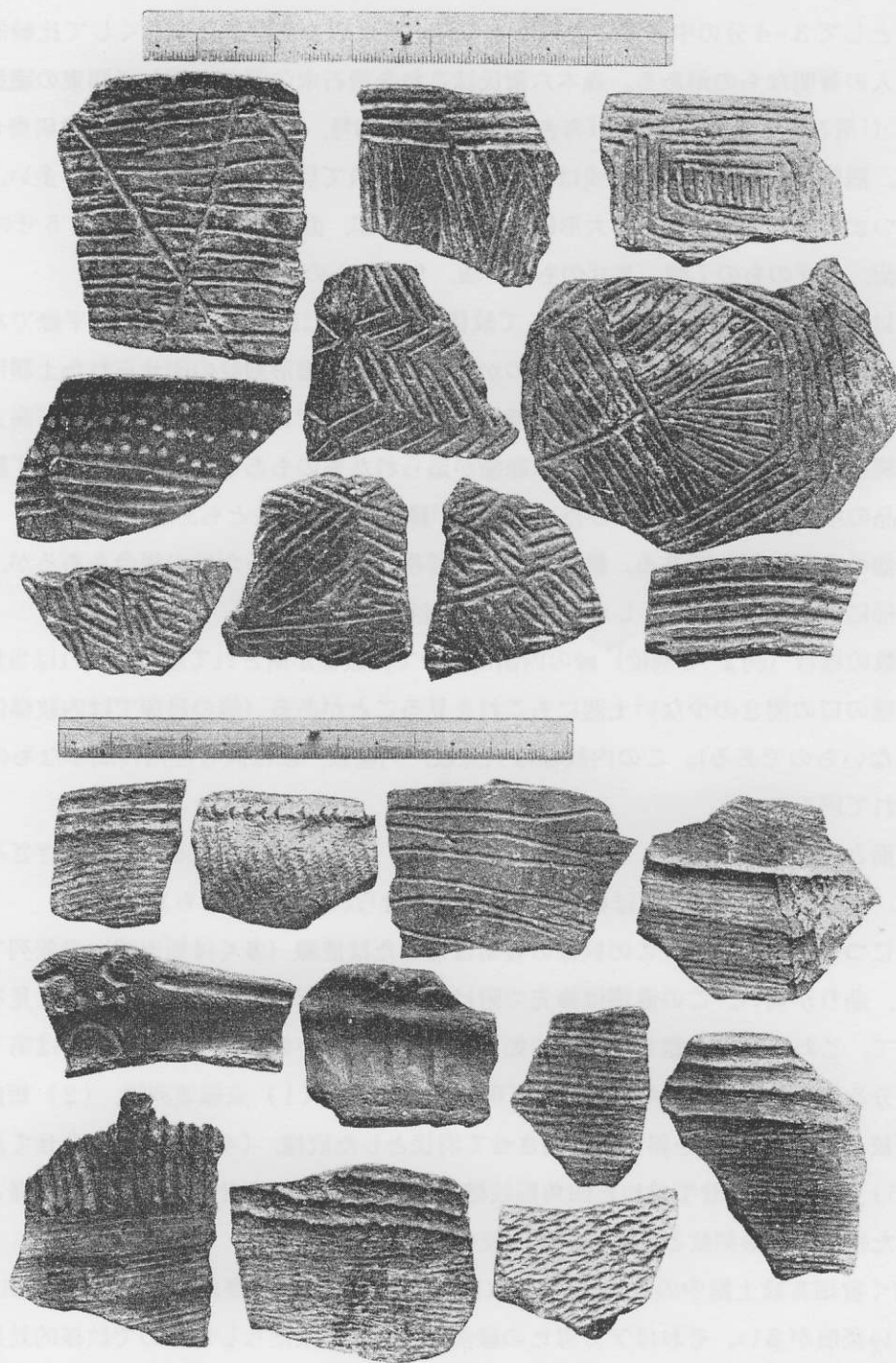
細形刻紋について考へると、この紋様の要素は点または直線（多くは短直線）の並列である。稀に曲線もあるが、曲りが弱い。この直線は棒先で附けられた沈紋だが、稀には凝爪形紋に見る様な節が附いて居る。さて、これ等要素を組合せて次の如く細形刻紋が画かれて居る。その大要は第7図写真を見ていただければ分るが、組立てられた紋様として現はれるものは（1）点線並列紋、（2）短直線或は長めの直線の並列紋、（3）短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様、（4）直線を組合せて重複三角形に近い紋様、（5）直線を組合せて重ねた四角形紋様、（6）直線を組合せて重ねた菱形紋様とする。かくして出来上つた紋様が細形刻紋として特異な印象を生ずるのだ。

上記の如く曾畑有紋土器中の8-9割までは表面に細形刻紋が印されて居つて内面には仕上げの時に附いたらしい条痕が多い。それはアカガヒの縁部で搔いて出来たらしいもので紋様の効果を帯びさせたものではない。

残りの数少ない紋様の内で割合に多いものは阿高式紋様（太形凹紋）といはるるもので、またこれは南福寺貝塚土器の紋様にも似て居る。ただしこれは小林久雄氏のいふ所の阿高式末期のもであつて、太

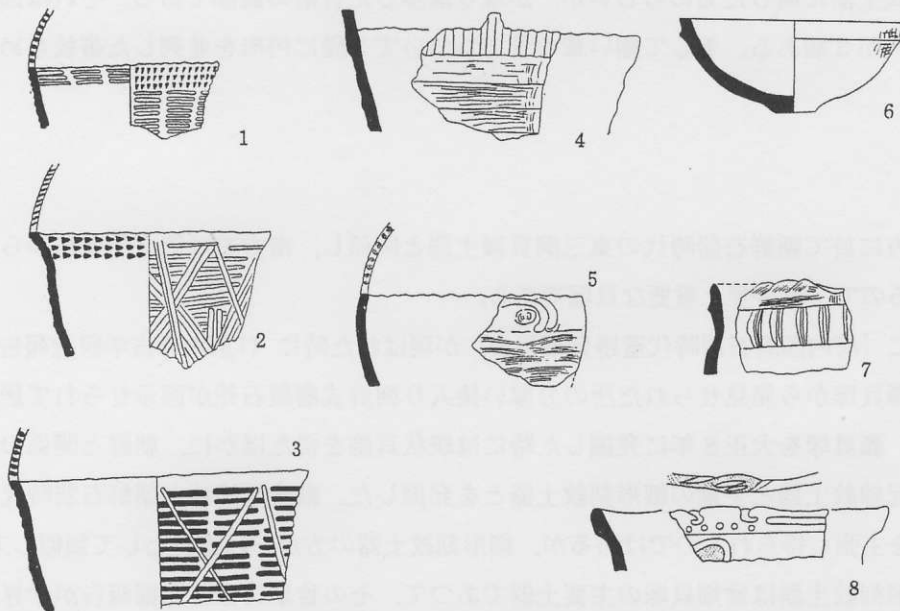
形凹紋帯が狭いものが多いのみならず紋様が簡素で瘤縁も見られる。ただしこの阿高式土器は細形刻紋土器よりも分厚に作られて居て焼きが赤い。器形は両者大差ない。またこの類は浜田、島田、小牧氏の「肥前国有喜貝塚発掘報告(下)」(『人類学雑誌』第41巻第2号, 大15)では曲線絡縄紋といはれた類だが、曾畑貝塚では曲線の種類多からず、また複雑でない。

かくの如くして曾畑貝塚土器の中から細形刻紋土器を引去り、さらにまた阿高式土器を引去った残余は極めて少数の土器片となるが、その紋様は単種類でない。それはここに轟式土器と仮に命名して写真

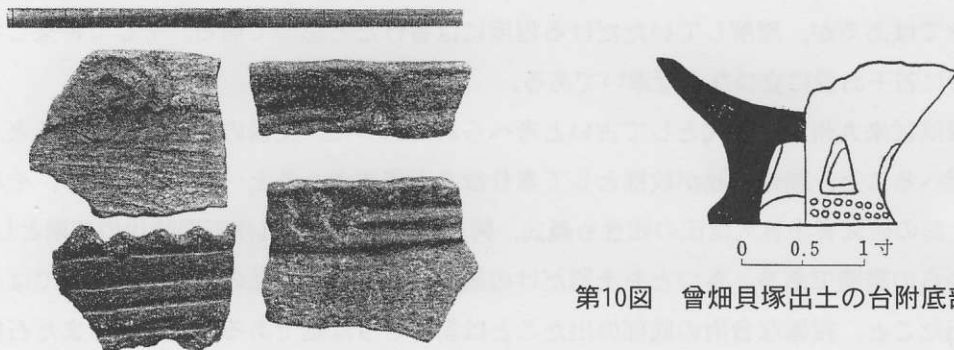


第7図 曾畑貝塚出土の土器片写真

上段 細形刻紋ある土器片(曾畑式土器) 下段 貝殻条痕紋と細隆起線紋のある土器片(轟式土器)とその他の土器片(上中央2片 中左2片)



第8図 曾畑貝塚出土の土器形態模式図（1, 2, 3 曾畑式 4 轟式 5 阿高式 6, 7, 8 鐘ヶ崎式？）



第9図 曾畑貝塚出土の阿高式土器片

第10図 曾畑貝塚出土の台附底部実測図

で示した土器片が主要なものである。便宜上これを轟式土器といふ理由は2片の縄紋の施紋された土器（轟貝塚から縄紋の施紋された土器は出なかつた）を除くのほか、写真に示した紋様の土器はすべて轟貝塚から出る。これは私等が発表した「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」（『京大考古学研究報告』第5冊，大9）を参照していただければ分るが，細隆起線紋があるし，みみず膨れに似た低い高まりの帯紋があるし，長い沈線紋もある。また前期「有喜貝塚発掘報告」で細形絡縄紋といはれたものもある。

縄紋の施紋された土器は僅かに2片出た。第7図下段の向つて上左から二つ目のものと，中左端のものである。前者はたいして特徴のない縄紋であるが，後者は曲線紋様ある磨消縄紋であつて御手洗B式或は綾村A式といはれる種類かも知れない。精巧品で朱塗の跡がある。出土した地層の深さは明瞭でないが，前文に記した如く，私等の掘つたB地域は明治年間に貝殻を採り去つた残地だから曾畑貝塚深層が主として残つて居つたものである。

最後に底部に就て注意すると土器底部は，すべて平底である。ただし精細にいへばその3分の1は底の中底部が僅かに上がった平底である。底の直径は2寸5分のもの2個，3寸のもの4個，3寸5分のもの3個，4寸のもの6個であるから，口径が中形であつた割に底は大形であつたといへる。

平底が上記の如く15個出たほかに僅かに1つの台附の底部が出た。この土質は赤味があつて少し厚手

なので多分阿高式土器に属したものらしいが、かなり進歩した台附の底部である。それは図示するが如く三角形の透し穴が3個ある。そして細い葦の管でつついて2段に円形を並列した帯紋をめぐるして居る。

第5章 結語

曾畑貝塚は北方に於て朝鮮石器時代の東三洞貝塚土器と関係し、南方では徳之島遺跡からさらに琉球土器へと連絡するので、考古学上重要な貝塚である。

古く大正7年に「河内国府石器時代遺跡発掘報告」が現はれた時に（『京大考古学研究報告』第2冊、第54頁）肥後国轟貝塚から発見せられた所の分厚い抉入り朝鮮式磨製石斧が図示せられて居る。それで次篇に記す如く、轟貝塚を大正8年に発掘した時には块状耳飾を得たほかに、朝鮮と関係のあるものとして大量の細隆起線紋土器と少量の細形刻紋土器とを発掘した。細隆起線紋が朝鮮石器時代土器に若干の類似あることを主張し得られるのではあるが、細形刻紋土器の方が一目瞭然として類似して居る。

しかもこの細形刻紋土器は曾畑貝塚の主要土器であつて、その曾畑貝塚は発掘報告が学界に現はれざる前に殆んど全滅した。そしてこの貝塚の最終遺物が割合に多数私の手に残つて居る。それで私はこの貝塚に就て念入りに記述して置いた。正式報告ほど図を多数挿入出来ないし、土器の紋様拓本を全部割愛したのは残念ではあるが、理解していただける程度には書けたと思つて居る。そして将来これが九州石器時代研究者に若干お役に立つならば幸いである。

さて曾畑貝塚は従来九州石器時代として古いと考へられて居つた。土器の器形が簡単なこと、土器の土質に雲母を混へること、細線刻紋が紋様として素朴なこと等を考へると一応肯定できる。それだから九州石器時代土器の研究者小林久雄氏の如きも轟式、阿高式、曾畑式を九州石器時代の前期として居る。

それは土器からの議論である。もつとも土器だけの議論であつても、私の発掘で、1片ではあるが磨消縄紋土器の出たこと、複雑な台附の底部の出たことは新しさうな話である。それからまた石杵が多く出て穀食を想起せしむること、馬歯が出ること、紡錘車の出ることも高文化、すなはち時代の下つたのを考へさせる。ただ私達のこの貝塚発掘は、地層的に深さを定めて土層を順次に上げて行つたのではないから、年代的序次を考へる上には熟考の余地があらう。しかし曾畑式土器を古いといひ切るには未だ後の研究を必要とする。

また曾畑貝塚に共存する阿高式土器から考へると阿高後期のものだと思へないこともない。ただし細線刻紋と阿高式紋様との間には曾畑貝塚で中間紋様或は移行紋様は見当らない様である。

（『日本貝塚の研究』岩波書店、1969年）